

グローバルにいがた

from
ブラジル

矢崎 愛さん

=新潟市北区出身=

前回日本に帰ったときは、ブラジルに戻るとき寂しい気持ちになつて、やたらと飲み物を買つていて、入国審査係の女性がうちの子を見るや「わあ、かわいい」と叫んで、バスポートのチケットもそこそこに近くの同僚に「ほらほら、かわいいでしょう」と宣伝す



シエクスピア生誕地でのマラソン大会で、スタート前に準備する大勢の参加者たち=ストラットフォード・アポン・エイボン

帰国して良さ再認識

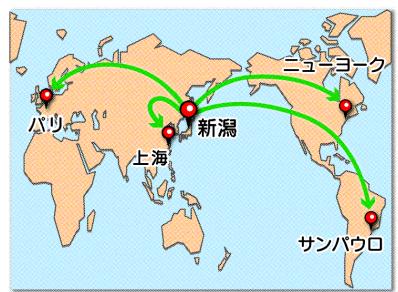
ブラジルに住んでだいぶたつ。18歳のときに来て19年がたつた。また日本に帰ると日本はすごいなやっぽりいいなと思う。サンパウロに戻つてくれば、アラジルはやっぱり素晴らしいなと思う。面白いもので、普段は特に日本への郷愁を募らせることがなく楽しむ暮らしている。でも、ひとたび日本へ行くことが決まるとうれしくじょうがなくなる。出発の日を折り数える。

長い長いフライトの末、成田に到着すると、空港の滑走路のアスファルトの良さに、もう感激する。田んぼと深い色合いの空の風景に、ああ日本に帰ってきた、と思う。待ちに待ったコンビニに散策に行く。日本の店員さんはみんな優秀で親切だ。本屋で本を探していくたら、店員さんが走つて取りにいってくれた。夫は自動販売機を気に入つて、やたらと飲み物を買つていて、新潟市江南区の実家では子どもたちがおじいちゃんおばあちゃんと仲良く過ごす。

前回日本に帰ったときは、ブラジルに戻るとき寂しい気持ちになつて、やたらと飲み物を買つていて、入国審査係の女性がうちの子を見るや「わあ、かわいい」とよしまたアラジルでがわいです。

東洋人の赤ちゃん! と叫んで、バスポートのチケットもそこそこに近くの同僚に「ほらほら、かわいいでしょう」と宣伝す

新潟日報社が開設した米ニューヨーク、ブラジル・サンパウロ、中国・上海、欧州(パリ)の国際交流拠点などを通じ、海外で暮らす本県関係者から現地の様子をリポートしてもらいます。また、毎月第1月曜日に紹介しています。また、新潟日報ホームページ「モア」にも掲載し、感想や意見を受け付けています。



第1月曜掲載



サンパウロ中心部のイビラブエラ公園。市民憩いの場として親しまれ、日本から戻つて訪れる「アラジルに帰ってきたな」と実感が湧いてくる

from
ロンドン

亞紀 ウィルソンさん

=上越市出身=

マラソンで社会貢献

ロンドンマラソンをはじめ各地のマラソン大会の特徴がチャリティーランです。多くが盲導犬の支援や赤十字などボランティア団体に付随しており、ランナーはマラソンの応援チャリティ支援として募金を募ります。

その代わりにボランティア団体はトレーニングのアドバイスやマラソンの練習会などランナーのサポートを全面的に行っています。

マラソンでは約53万歩(1億円弱)の寄付が集まつたといわれています。

私が勤務する英系ファッショニアランが行われ、社内一丸となって募金を募り、社会貢献の一環として地域の恵まれない子供たちを支援する活動を行っています。

新潟でも各地で地域の特徴をふんだんに盛り込んだマラソンイベントが行われ、新潟の観光促進の役割を担っているようです。

新潟でも各地で地域の特徴をふんだんに盛り込んだマラソンイベントが行われ、新潟の観光促進の役割を担っているようです。